

# 場所を表す助詞に関する学習者の文法

大関 浩美

## 1. 事象

場面：筆者が勤務する大学の留学生センターの初級クラスの授業（学期終盤）

使用教材（教科書）：Situational Functional Japanese 1~3（筑波ランゲージグループ）

時期：2005年1月ごろ

学習者：スイス人学習者（20代男性、ドイツ語母語話者）

観察：学習者が「山の上でお弁当を食べた」ということを言おうとし、「山の上」まで言って言葉を止め、「に？で？」と教師（本稿筆者）に質問してきた。もちろん後続の部分を聞かなければわからないため、先を続けてもらったあと、こんなことがまだわかっていない学習者ではないはずと思いながらも、「食べました」は、アクションですよ。だから、「に」ですか、「で」ですか？」とヒントを与えた。すると、その学習者は「それはわかります」と答え、①アクションだったら「で」で、「ある」「いる」だったら「に」ということはわかっていると明確に述べた。ところが、そのあと、「でも、「山の上」だから「に」ですね？」と続けたのである。②「上」「中」「前」などの時は「に」ではないかと、この学習者は言った。

## 2. 報告事象の持つ意味

### 2.1 学習者独自の文法

この報告は、第二言語習得論の観点からは二つの点で非常に興味深い。まず第一に、先行研究において習得過程を説明するために提起された認知過程が、教室活動のさなかに学習者自身による内省報告の形で確認されたということである。迫田（2001）は、中級レベルの学習者（中国語母語話者、韓国語母語話者、その他の言語の母語話者、各20名）を対象に、助詞の穴埋めテストを行い、「位置を示す名詞（中・前）＋に」、「地名や建物を示す名詞（東京・食堂）＋で」という組み合わせで助詞を選択す

る傾向が見られたとし、前置される名詞の種類によって後続の助詞を使い分ける独自のルールを学習者が作り出していることを指摘している。学習者がこのようにインプットにおいて共起頻度の高い要素同士をつながり「かたまり」として処理することは、多くの研究で指摘されている（例えば Weinert 1995 参照）。前述の学習者も、「で」に関しては何も述べていなかったが、「に」に関しては、迫田の指摘したとおりの結びつけをしていた（上述②）と言える。

### 2.2 2種類のルールの共存

さらに、もうひとつ重要なことは（実は個人的にはこちらのほうが興味深いのだが）、この学習者が、目標言語のルールによる「に」と「で」の使い分けをほぼ理解し保持している（上述①）にもかかわらず、位置を示す名詞には「に」という学習者独自のルールも並行して初級後半まで持ち続けていた（②）ということである。学習者が独自の文法体系（「中間言語」）を作ることは、第二言語習得研究の分野ではすでに言い古されてきたことであるが、このように、我々（研究者および教師）から見れば目標言語でのルールが習得されれば否定されて共存し得ないと思われる複数のルールが、共存して保持されていることもあるというのは非常に興味深い。インプットに現れるパターンの偏りなどから自ら抽出したルールが、学習者にとって、教室で教師から学んだルールに劣らず重要だということを示唆している。

確かに、「図書館で勉強する」「机の上に本がある」などの文では、①と②の両方のルールにしたがっているので、2つのルールは競合しなかったのだろう。後ろに続く要素での使い分けと、前の語との結びつきという、いわば位相の異なるルールであるため、この学習者の中間言語体系の中で共存できたことが考えられる。しかし、「山の上で、食べた」ということを言いたい場面に直面し、とうとうこの目標言語ルールと独自のルールの2つが競合してし

まい、「述部がアクションなら「で」ということはわかっている (①)。でも、「山の上」だから「に」ではないのか? (②)」という問いかけが出てきたのだろう。

このように、上記の場面に至るまでの間、学習者が作ったルール (②) がずっと保持されてきた理由としては、位置の名詞のあとには「で」も使えることを学習者に気づかせるインプット (肯定証拠: positive evidence) が得られなかったためと推察される。実際、筆者の授業を振り返ってみると、授業の中で「～の前で」「～の中で」のような例文はあまり出していないように感じる。そこで、代表的な日本語の初級教科書 (「みんなの日本語 初級」「初級日本語 げんき」「Situational Functional Japanese」) を調べてみたところ、「に」「で」導入以降の課でも、「中」「前」「下」などととも場所の「で」が使われた例文は非常に少ない。したがって、このような中間言語ルールを保持している学習者にその再構築を促し「中」「前」などの位置を表す名詞のあとに「で」が可能であることに気づかせるためには、肯定証拠となるインプットが必要だという推論がなりたつ。

### 2.3 教育への応用可能性

中間言語ルールの再構築のためにどの程度の量

の肯定証拠が必要なかを調べた実証研究は今のところ見当たらない。1-2回程度の肯定証拠があればいいのか、あるいは何度も触れる必要があるのは今のところ不明なのである。しかし、それぞれの教師が教室で試してみることも可能であり、筆者自身もぜひ試してみたいと考えている。

#### 参考文献

- 迫田久美子 (2001) 「学習者の誤用を産み出す言語処理のストラテジー(1) - 場所を表す「に」と「で」の場合」『広島大学日本語教育研究』11, 17-22.
- Ellis, R. (1994) *The study of second language acquisition*. Oxford: Oxford University Press.
- Weinert, R. (1995) The role of formulaic language in second language acquisition: A review. *Applied Linguistics*, 16, 180-205.

#### 参照した教科書

- スリーエーネットワーク (1998) 「みんなの日本語 初級 1、2」スリーエーネットワーク
- 筑波ランゲージグループ (1994) 「Situational Functional Japanese」凡人社
- 坂野永理ほか (1999) 「初級日本語 げんき」The Japan Times

おおぜき ひろみ / 東京大学留学生センター  
ozeki@ic.u-tokyo.ac.jp